

近代中国語関係書における自律移動表現の日中対照研究

金 敬玲 (國學院大學大学院文学研究科)

A Japanese-Chinese Contrastive Study of Autonomous Motion Expression in Modern Chinese Language Education-related Textbooks

JingLing Jin (Graduate School of Literature, Kokugakuin University)

要旨

日清貿易研究所や東亜同文書院で教科書として用いられていたとされる明治 36 (1903) 年に出版された『華語跬歩』とその日本語訳である『華語跬歩総訳』(明治 37 年出版)を調査資料に「問答」という場面による会話文から抽出した中国語文 478 例、日本語文 466 例を分析対象に、同じ出来事における日中両言語の自律移動に関する表現や表現パターンを考察し、当時の自律移動表現の表現習慣として同じ事象を表現するに際し中国語の方が、移動動詞を選択する傾向が強いことと、会話文において経路関連要素である中国語の前置詞は日本語の後置詞ほど必要性が高くないことと、日本語における単独主動詞の使用は圧倒的であること及び、日中両言語ともに会話文において様態情報の必要性が非常に低いことが観察できた。

1. はじめに

Talmy (2000) は、移動事象について日本語を動詞枠付け言語 (verb-framed language) と、中国語をサテライト枠付け言語 (satellite-framed language) と、分類しているが、Slobin (2004) は、等位枠付け言語 (equipollently-frame language) という 3 つ目の類型を提案し、中国語はこの種の言語に属すると述べている。

類型論的には異なるタイプの言語ではあるが、同一の移動事象を表現するにあたり、「様態」「経路」「直示」の情報が競合することなく表現できる (小嶋 2019) という面では、日本語と中国語は同じタイプの言語と見做すことができる。

そこで、本稿では主語が自らの意志で移動する事象と無生物主語が主語となる移動事象を併せて便宜的に自律移動事象とし、その事象の発生に伴う自律移動表現における日中両言語の対照研究を行う。

2. 先行研究

松本 (2016) は『日本語歴史コーパス』を用いて古代語の移動動詞を格助詞「より」と「を」とが「起点」と「経路」のどちらを表すかは動詞の意味的特徴によって決まるとし、移動動詞を 4 つのグループに分類している。

松本 (2017) は、日本語の移動表現を移動事象表現タイプごとに検討し、大規模コーパスに基づく数量的分析を報告している。その中で、主体移動に関しては「現代日本語書き言葉均衡コーパス・モニター公開版 (2009 年度)」で、生年が 1940 年代の著者のデータから選びだした 882 例を分析対象に、様態、経路、ダイクシスの表現頻度及び経路とダイクシスがどの位置で表現されることが多いかについて考察している。

LAMARRE (2017) は、中国語の経路を表す表現の全体像を紹介し、経路句・移動の参照

点を表す場所名詞句が動詞の前と後という二つの位置に現れる要因について論じている。また、LAMARRE (2017) で用いたコーパスは5部の文学作品と1部のテレビドラマで、文学作品は老舎(1899-1966)著の《骆驼祥子》を除き、著者の生年は1930年代から1950年代であり、テレビドラマは2003年の作品である。

Shi&Wu (2014) は、中国語を古代中国語 (Old Chinese : 1世紀以前)、中世中国語 (Middle Chinese : 2世紀から6世紀まで)、前近代中国語 (Pre-Modern Chinese : 7世紀から19世紀まで)、現代中国語 (Modern Chinese : 清末から現在まで) の4つの時代別のテキストから「物語性のあるもの、特に話し言葉のもの (we only selected narrative ones, particularly those of spoken mode)」を180例ずつ選びだし考察することを通じ、「中国語は動詞枠付け言語からサテライト枠付け言語へと典型的に移行している (Chinese has been undergoing a typological shift from a verb-framed language to a satellite-framed language)」とし、「現代中国語は、典型的な動詞枠付け言語とも、典型的なサテライト枠付け言語とも異なる多様なパターンを用いて運動事象を表現する (Modern Chinese adopts diverse patterns to encode motion events, which are different from both typical verb-framed languages and typical satellite-framed languages)」と述べている。Shi&Wu (2014) で用いた前近代中国語の資料は南宋から元末まで (1127-1368) のもので、現代中国語の資料については明示していないが、1968年以降のものであると推測される。

その他、特定の移動表現に関する日中対照研究が多く見られる。

3. 調査資料

本稿は、明治36(1903)年に出版された『華語跬歩』と明治37(1904)年に出版された『華語跬歩総訳』を調査資料に「問答」という場面による会話文を分析対象に自律移動を表現する文を抽出し、同じ出来事における日中両言語の自律移動に関する表現や表現パターンを分析する。

御幡雅文(1859-1912)が著した『華語跬歩』¹は上海にあった日清貿易研究所²や東亜同文書院³で用いられた中国語の教科書である(石田2013)。『華語跬歩』は単語部分、短文(語句)部分、会話部分の三つの部分により構成され、本稿の対象となる部分は会話部分である。会話部分は日常会話の「家常問答」50章と立場や職業に応じた受け答えを教える「接見問答」30章からなっており、いずれも解説や訳文が付されていない。

伴直之助⁴(1862-1937)編『華語跬歩総訳』は『華語跬歩』の訳本で、自序に「本書の翻訳に際し(中略)京都清語講習所講師北京人任文毅君も、亦た少なからざる厚意を寄せられたり、茲に謝意を告白す」と記しており、翻訳する際、ネイティブスピーカーへの確認等があったと思われる。

『華語跬歩』から選び出した中国語文478例と『華語跬歩総訳』から選び出した日本語文446例を分析対象に近代の会話文における日中両言語の自律移動表現を考察する。

¹ 石田(2013)によると、『華語跬歩』は三十年あまりの長きに渡って改訂されながら刊行されていたという。

² 1890年から1893年にかけて清国上海に存在した日本の教育機関。

³ 東亜同文会が1901年上海に設立した学校で、日本の中国進出のための中堅幹部を養成する機能を担っていた。1921年専門学校、1939年大学となり、商務科(一時農工・政治科も設置)を置くが第2次大戦後廃止される。卒業生約5000名。

⁴ 日本の実業家、政治家、衆議院議員(1期)。

4. 移動に関わる各表現について

日本語と中国語の自律移動を表す動詞として、「登る」－“登”、「入る」－“进”のような移動の経路情報を持つ「経路動詞」、「歩く」－“走”、「走る」－“跑”のような移動の様態情報を持つ「様態動詞」、「行く」－“去”、「来る」－“来”のような話者を基準点として移動を捉える「直示動詞」が存在していることは共通している。また、同一の移動事態を表現するにあたり、これらの動詞の表す情報が競合することなく表現できる同じタイプの言語である。

さらに、「部屋の中」の「中」、「城外」の“外”のような参照物との位置関係を表す位置表現が日中両言語に共に用いられている。

一方、日本語においては「から」「まで」「に」「へ」「を」「より」など経路後置詞を使用するのに対して、中国語においては介詞“从(から)”，“往(へ)”など前置詞で移動の起点や方向を表す。

5. 『華語跬歩』(中国語)における移動表現について

5.1 移動動詞について

5.1.1 “走”について

中国語の“走”は“走进教室”のように「歩く」の意でしばしば移動における様態動詞の代表例として挙げられる。“走”の「去る」「離れる」の意について論じる研究も見られるが、方向性が含まれているか否かについては議論されているようである。

丸尾(2005)は“走”について様態移動動詞“走₁[歩く]”と方向移動動詞“走₂[去る]”と2種類に分けている。それに対して、呉(2000)は“走”について移動様態動詞の他、「ある場所を離れるという移動の意味をもっているが方向性は示されていない」と述べている。

『華語跬歩』では“走”が25例みられ、様態を表す「歩く」の意で用いられるのが4例あり、本稿では“走₁”とする。

1) 要下来走走/降りて歩こーとすれば (接見問答第27章)

しかし、その他の3例の主語は腕時計で、腕時計の針の動き具合について話し合っており、人間の移動様態に注目している会話ではない。

また、下記例文のように「この場からいなくなる」という「去る」「離れる」の意で用いられる例文が12例見られ、本稿では“走₂”とする。

2) 早就该走咯/疾に往かねばならんのです (接見問答第29章)

これらの例文は丸尾(2005)で指摘している方向移動動詞に該当するものだと思われ、会話の文脈にはこの場を離れたあとの目的地が記されており、“走”の経路情報が得られ、「往く」「参る」との対応が見られる。

さらに、下記例文が見られる。

3) 走宅门子/屋敷廻り (接見問答第16章)

日本語訳文は「廻り」という表現を使用しているが、これは“走”の「訪問する⁵」を表す意で、目的地があることが示されており、本稿では経路動詞“走₂”と見做す。

その他、上記の「経路」情報と「様態」情報とを持たない“走”が8例見られる。

- 4) 共走了几天/皆なで幾日御掛りでした (接見問答第 27 章)
5) 不是应当走三天哪么/三日掛らねばならん所ですが (接見問答第 27 章)

これらの例文は移動に所要する時間に注目し、移動の「様態」情報と「経路」情報を持たない中立的な移動を表しており、本稿では“走₃”とする。

本稿で見られる“走”を【表 1】に示すように分類する。

【表 1】『華語跬歩』における“走”について

意味用法	様態動詞	経路動詞	中立移動動詞	計
用例数	4	13	8	25

5.1.2 “到”について

“到”について Shi&Wu (2014) の古代中国語 (Old Chinese) には見られておらず、中世中国語 (Middle Chinese) では「到着 (reach)」の意で経路動詞 (Path verbs) に分類されている。前近代中国語 (Pre-Modern Chinese) においても経路動詞として分類されているが「～に行く (go to)」の意で用いられ、現代中国語 (Modern Chinese) においては経路動詞として「到着 (arrive/reach)」と解説されている。

LAMARRE (2017) は“到”は本来「到着する」「着く」を意味するが、参照物を示す名詞句を挟み直示動詞の“去/来”との組み合わせで“到…去”, “到…来”という「～に行く」「～に来る」を意味することができるとし、「到着より前の移動部分がプロファイルされる結果、汎用的な移動動詞に転じたと考えられる」と述べている。

Shi&Wu (2014) の中世中国語においては“到”が移動動詞としての単独使用のみ見られ、「到着」と解説していると思われるが、前近代中国語の内訳を見ると、“到…来”という直示動詞との組み合わせのほか、移動動詞としての単独使用の“到”の例文が見られるにも関わらず、「～に行く (go to)」と解説していることは議論の余地があるようである。

『華語跬歩』における“到”の出現頻度は 80 で、下記例文のように“到…去”, “到…来”で「～に行く」「～に来る」を表現する例文は 37 例見られる。

- 6) 没到别处去/外の處へは参りませんでした (家常問答第 20 章)

下記例文のように移動動詞として単独で使用され。「到着」を意味する“到”は 32 例見られる。

- 7) 他是昨天到的/あの方は昨日着きました (家常問答第 44 章)

⁵『中日辞典第 3 版』(2016) は“走”を「歩く」「離れる」の外「訪問する、交際する」と解釈している。

その他、“到”が単独で使用されながら、「～に行く」を表す例文が下記のように見られる。

- 8) 我们先到了店里/私共最初宿屋に参りましたが (家常問答第 25 章)
9) 是到几个施主家取月例银子/はい、諸處の檀家へ月例の錢を受けに往くのです (接見問答第 21 章)

例文 8) 9) は“到”は移動を表す主動詞であり、過去の事象(例文 8)と未来の事象(例文 9)との異なる時制を表しているが、同じく方向指向の「～に行く」の意味を表している。例文 8) では“先(まず)”によって“店(店)”に行ったあとにも出来事があることを提示しており、例文 9) では“施主家(檀家)”に行ったあとの出来事である「月例の錢を受ける」を提示している。つまり、到達を前提に移動以外の出来事が後続する場合でも、単独で使用される移動動詞の“到”は“去”と同義で「～に行く」を表現することができる。

丸尾(2005)は、“去图书馆借书(図書館に本を借りに行く)”と“到图书馆借书(図書館に行って本を借りる)”が形式的に同義になると指摘し、それは後続事項との関連において“去”は着点指向となるため、移動そのものではなく移動の結果に重点がある“到”と同義になると解説しているが、これは後続する出来事に重点を置いた解説に思われる。目的地に到着しないと後続する出来事が発生しないという目的地までの到着を重点に置く解説となると、目的地に到着するための移動—つまり“到”の方向指向が際立つことになるという考えもあり得るだろう。

5.1.3 二音節動詞について

『華語跬歩』に見られる移動動詞は上記“走”，“到”を含め単音節動詞が普通だが、“起身”が 8 例、“动身”が 4 例と「出発する」を意味する二音節移動動詞が見られる。いずれも内部構造が「動詞+名詞」であるが、“起”は横になる状態あるいは座る状態から立ち上がる状態になる垂直方向の移動を表す動詞であるのに対して、“动”は「身を動く」という中立移動動詞である。共通しているのは、前項の動詞のみの部分で移動動詞として判断することは難しく、“身”が加わることによって「出発する」という経路動詞を成す点である。また、動詞と名詞で組み合わせられるものであるため、間に“的”を挟む形式での使用もできる。

- 10) 他是多咱起的身/車夫は、いつ天津を登つたのだろー (家常問答第 35 章)
11) 他说他前几个早起动的身/一昨日の朝、登つたと申します (家常問答第 35 章)

5.2 動詞以外の経路表現について

5.2.1 方位詞について

『華語跬歩』に見られる方位詞を用いる例文 29 例を【表 2】に示す。

【表 2】『華語跬歩』における方位詞について

位置関係	「外」	「中」	「上」	「西」
方位詞	外	里	上	西
用例数	7	13	8	1

LAMARRE (2017) は、中国語の方位詞の統語的機能の重要性を示し、中国語の方位詞に関して「地名など、それ自体で場所を含意する一部の名詞を除き、移動の参照点を表す名詞が前置詞と共起する場合、必ず方位詞が接続される」と述べ、“里”と“上”の使用頻度の高さを提示している。【表 2】に示すように、“里”と“上”の使用頻度は比較的に高いと言えるものの、方位詞を用いた例文の割合は決して高いとは言えない。また、後節で詳しく述べるが、前置詞の使用頻度も高くなく、方位詞と共起する例文もわずかである。

下記例文のように場所を表す名詞につき、かつ、前置詞“从”と共起するものがある。

12) 从家里来/宅から参りました (接見問答第 4 章)

日本語訳文の「宅(の中)から」の「~の中」が省略できる点と異なり、中国語においては“里”は省略できない。これについては LAMARRE (2017) でも指摘している。その他、場所を表す名詞がなく、方位詞だけで場所を表す例文が下記のように見られる。

13) 就往回里赶/直ぐに帰りましたが (家常問答第 46 章)

14) 他现在是在外去了/彼は只今外省へ出て居ります (家常問答第 3 章)

例文 13) は“里”を消した“就往回赶”でも成り立ち、むしろ“里”がない方が現代中国語として自然に感じる。これは方位詞の“里”が「音声面でストレスを受けず接語的な側面が強い (LAMARRE2017)」ため、会話文では許容範囲内にあるとも考えられるが、その他の要因もあると思われる。その点については次節で言及する。

方位詞“外”を使用した例文は 1 例(“城外”)を除き、6 例が例文 14) のように名詞にかかわらず、経路動詞と直示動詞の間に挟み、「外省へ行く」意を表している。同時期の中国語関係書⁶においては“出外去”を「旅行に出る」と翻訳されており、「遠出」を意味する固定用法ではないかなお考察の余地があるように思う。

“西”については下記例文のように「太陽が西へ沈む」という特定用法である。

15) 老爷儿都大平西了/御日さんが、も一入り掛つた (接見問答第 15 章)

5.2.2 前置詞について

『華語跬歩』に見られる前置詞は起点を導く“打”，“从”と方向を導く“往”が見られる。その中で、起点を導く“打”と“从”は場所を表す名詞につき、「~から」を表しているが、方向を導く“往”は場所名詞のほか、方位詞“里”，“外”との共起で二音節の経路情報を与えている。

16) 您若是往外去，可以升什么呢/若し地方へ往かるることとなれば、何役に御昇進なさることが出来ます乎ね (家常問答第 9 章)

前置詞“往”と方位詞の共起により二音節の経路成分を成すことについて、LAMARRE

⁶ 『清語三十日間速成』(1904) と『支那語之勸』(1906) との 2 点を確認。

(2017) は北方語で多く使用され、着点指向の方向を表すとしている。そうすると、前節の例文 13) においても、“里”の音声面の特徴のほか、“往回”で方向を表現し、“里”で着点を表現したい話者の気持ちが含まれていると解釈するのはできなくもないように感じる。

中国語の前置詞は動詞に由来するとされている。前節 (5.1.2) で移動動詞“到”について述べたが、“到…去”構文で目的地に到着したあと後続する動作がない場合、“到”は前置詞として見なすことができる。つまり、例文 6) の“到”は方向を導く前置詞として機能しているとも解釈できる。『新著國語文法』⁷ (1924) は“到”について「述語の前に付けることを要して、未だ到着せざる“到”は目的を表すもので“往”と通用せらる」と述べている。現代中国語においても“到”が前置詞なのか動詞なのかについて議論されている (劉 1998、LAMARRE 2017)。本稿では、“到…去”構文の中で、下記例文 17) のように動詞“去”の前または後に動詞フレーズがあり、移動の目的や理由を述べている文における“到”を動詞とする。

17) 我现在到讲书堂送信去/手前は今まから、教会堂へ手紙を届けに参ります
(家常問答第 1 章)

また、例文 6) のように移動に注目し、移動後の事象を特定できない例文における“到”を前置詞とする。この場合、“到”を 6) ’ のように“往”に変えても同義になる。

6) 没到别处去/外の處へは参りませんでした (家常問答第 20 章)
6) ’ 没往别处去/外の處へは参りませんでした

以上のことを踏まえ、『華語跬歩』に見られる“到”を【表 3】に示すように分類する。

【表 3】『華語跬歩』における“到”について

意味用法	前置詞	経路動詞		計
用例数	9	到着	～に行く ～に来る	80
		32	39	

6. 『華語跬歩総訳』(日本語)について

6.1 移動動詞について

6.1.1 敬語表現の分類について

『華語跬歩総訳』における移動表現において、最も際立つのは敬語の使用である。「出る」「行く」「来る」の使用も見られるものの、「尊敬語」と「謙遜語」を含め敬語を使用した例文は 202 例 (43.35%) 見られる。『華語跬歩』の「接見問答」が立場や職業に応じた受け答えを教える教科書として使用されていたのは確かであるが、移動を表現するに際しては敬

⁷ 黎錦熙『新著國語文法』(1924) は中国最初の本格的な現代中国語文法書であり、口語文法書である。

語の使用はほとんどない。明治期のその他の関係書を確認したところ、敬語の使用は見られなくはないが、『華語跬歩総訳』の方が圧倒的に多い。

明治43年に出版された『華語跬歩総訳 上 増補』と『華語跬歩総訳 下 増補』は『華語跬歩』の著者である御幡雅文が翻訳者となっており、同じく敬語が多用されているが、『華語跬歩総訳』は原著者の意図に応じた翻訳だと考えられる。

本稿は松本(1997)を参照に日本語の移動表現を分類するが、敬語をはじめ松本(1997)で言及されていない表現の分類を検討する。

まず、『華語跬歩総訳』で見られる主な敬語表現とそれに対応する表現及び本稿における分類を【表4】に示す。なお、「御帰りになる」や「帰られる」のような「お～になる」「られる」が敬語標識となるものについては言及しない。

【表4】本稿における『華語跬歩総訳』の敬語表現の分類について

No.	敬語表現	対応する表現	用例数	動詞の種類
1	参る	行く・来る	77	直示
2	御出で類	出る(行く・来る)	55	直示
3	御越し類	越す(行く・来る)	5	直示
4	伺う	訪れる	7	経路
5	見える	来る	1	直示
6	いらっしゃる	行く・来る	1	直示
7	お伴致す	付き従って行く	2	付帯行為+直示

「参る」は「行く・来る」の謙譲語として、「いらっしゃる」は尊敬語として使用されているため直示動詞として分類し、また、「見える」が1例「来る」の尊敬語として用いられている例文が見られ直示動詞とする。

「御出で類」というのは「御出でになる」「御出で下さる」「御出でる」のようなもので『国語大辞典』において「「出ること」の尊敬語から転じて「行くこと」「来ること」「居ること」の尊敬語」と記されているが、「出る」ではなく「行く・来る」の尊敬語としてよく使用される敬語表現であることから、本稿では「行く・来る」の尊敬語として直示動詞と見做す。

「御越し類」とは「越す」を基本形とした「御越しになる」「御越し下さる」のような表現で「行く・来る」の尊敬語として使用されているため直示動詞に分類する。

「伺う」については「訪れる」の謙譲語として経路動詞に分類し、「お伴致す」は「付き従って行くこと」の意で付帯行為(付き従って)+直示(行く)と分類する。

6.1.2 漢語複合移動動詞について

移動に関する漢語複合動詞は16例見られ、松本(1997)で述べている「経路位置関係+基準物の包入」と見られるものが「入城する」「帰国する」「帰宅する」「上京する」「着京する」「出勤する」である。松本(1997)では「同道する」が見られていないが、「同行する」を様態+「行」と分類している。これに基づいて本稿では「同道する」を「様態+経路」に分類することにする。また、「外出する」を「方向性+経路」と見做す。

6.1.3 「這入る」と「出掛ける」について

「這入る」を使用した例文が4例見られ、「入る」を使用した例文が2例見られる。『国語大辞典』では「這入る」を「「はいる(入)」の古形 人などがはって内にはいる」と解説しているが、例文を見ると「入る」との使い分けが明確ではない。

- 18) 私の這入ったのは哈達門です (家常問答第5章)
 19) 晩には城に入ることが出来るわいと思つた (接見問答第27章)

例文18)の「哈達門」はお城の門のことで、例文18)も例文19)も「お城に入る」という出来事を述べている。「門にはいる」ことは「門」の大きさによって「這う」という動作が伴う可能性があるが、例文20)の「手にはいる」事象には「這う」という動作が伴えないと考えられ、本稿では「這入る」と「入る」と同じ表現と見做し、経路動詞に分類する。

- 20) 私の手に這入つてからは、まだ磨かしたことは有りません (家常問答第10章)

「出掛ける」が17例見られるが、「出る+掛ける」とではなく、「出る+接尾辞」として「出る」と同じく経路動詞に分類する。

6.2 後置詞

『華語跬歩総訳』は方位詞が見られない一方、後置詞を使用している例文は147例見られ、32.96%を占めている。

【表5】『華語跬歩総訳』における後置詞の現れ方

後置詞	動詞との共起の出現頻度			
	経路動詞	直示動詞	複雑述語	計
から	2	15	1	18
まで	0	1	0	1
から～まで	0	1	0	1
を	9	2	1	12
に	9	4	0	13
へ	29	66	6	101

「から」は経路動詞と直示動詞及び「帰って来る」と共起する例文が見られ「起点」を表している。「から」を用いた日本語文と対応する中国語文を見ると、11例が起点を表す前置詞“打”“从”と対応しており、4例がダイクシスによる場所提示例文と、3例が無生物主語の移動表現である。「から」の意味用法は様々であるが、主体移動の移動表現における「起点」を表す場合、中国語の前置詞“打”“从”との対応関係にあると言えよう。

「まで」は一例直示動詞と共起し、「到達の限界点」を表しており、対応する中国語標識はなく、「から～まで」と対応しているのは方向を導く“往”である。

「を」と共起するのは経路動詞が多く、「城を出る」「天津を発つ」「紫竹林を立つ」と「起点」を表すものがほとんどであった。また、1例「通る」と共起し、「経路」を表すものが見られる。

その他、次のような例文が見られる。

- 21) 船で御越しでした乎、陸を御越しでした乎 (接見問答第 27 章)
22) 私は陸を参りました (接見問答第 27 章)

「越す」も「参る」も方向指向の移動動詞であるが、例文 21) 22) の「陸」は文脈上「起点」となっていない。そうすると、「を」の「起点」や「経路」とする解釈は上記例文には適応されない。田中 (1997) は、「Xを」の場合「動作が作用する対象としての X」と解釈し、「を」が「経路」や「起点」を表すのはその働きの結果として「経路性」が浮かび上がったとしている。つまり、「城を出る」の「を」は「起点」としての「城」を表しているのではなく、「出る」という動作が作用する対象としての「城」を表していると認識すべきであると述べている。例文 21) と 22) の「陸」を直示動詞の動作が作用する対象としての「陸」とすれば「を」の解釈は成り立つと考えられる。

「に」は直示動詞と経路動詞（「入る」「戻る」「着く」「帰る」）と共起し、「着点」を表している。

「へ」は最も多く見られる後置詞で、「方向」を表す例文の他、下記 3 例のように「到着」を意味する経路動詞との共起も見られる。

- 23) 私が家へ着きましたから、間もなく、好くなりました (家常問答第 17 章)
24) 六時に渡し場へ着き (家常問答第 46 章)
25) あちらへ着して二箇月餘経つと (接見問答第 14 章)

『日本文法大辞典』(2001) は、「へ」の現代用法において「方向を表すのが本来の用法であるが、現代語では帰着点を表す「に」と区別して用いられることが少なく（中略）動作・作用の帰着点を「へ」で表すことも多い」と述べている。『華語跬歩総訳』では 101 例中 3 例のみ「へ」の帰着点用法が見られるが、明治期からその意味用法での使用があったようである。

7. 考察

以上、『華語跬歩』における中国語の自律移動表現と『華語跬歩総訳』における日本語の自律移動表現をそれぞれ見てきた。方位詞に関して中国語では 29 例あるのに対して、日本語例文ではその使用が見られず、日本語の後置詞が 147 例と 32.96% 占めているのに対して、中国語の前置詞は 28 例と多く使用されているとは言い難い。また、主体移動の移動対象にのみ、起点を表す中国語の前置詞“打”“从”と日本語の後置詞「から」との対応が見られる。

『華語跬歩総訳』が『華語跬歩』の日本語訳であるのにも関わらず、自律移動表現に関する例文の数が 446 例と 478 例で、日本語の方が 32 例少ない状況にある。このような状況に関して、まず無生物主語の例文を見ると、

26) 您的行李都来了/あなたの御荷物が、皆んな参りました (家常問答第 8 章)

のように、物全体の移動を日中両言語ともに主体移動表現で表しているものと、

27) 平常走的快慢怎么样/平常動き方の遅速は、どんなものです (家常問答第 10 章)

28) 走的也不快不慢/速くも無ければ、遅くも無く、 (家常問答第 10 章)

のように、物(腕時計)の一部(針)の動きを中国語では移動表現で表しているのに対して、日本語では移動表現を用いない場合があることが観察できる。

次いで、中国語で「中立移動表現」に分類している“走”を使用した例文は、

29) 不是应当走三天哪么/三日掛らねばならん所ですが (接見問答第 27 章)

のように、日本語の表現習慣上、移動表現を用いるのが難しい場合が存在する。さらに、下記例文のように、中国語の主体移動表現を日本語の使役移動表現で表すものがある。

30) 这个鱼是离海就死/此の魚は水から出すと間もなく死ぬので (接見問答第 23 章)

最後に挙げられるのは、日本語の敬語表現の使用である。

31) 我就先回去咯/私は一と先づ御暇致しました (接見問答第 6 章)

中国語の“回去”は「帰る」の意だが、日本語訳では「御暇いたす」という「辞去の際の挨拶」の敬語表現を使用しており、「御暇いたす」に移動の意味が含まれているとは言い難い。

上記 4 点の理由で中国語と日本語の移動表現に関する例文の用例数に差が生じたと言えるが、次は動詞の種類と頻度について見てみる。まず、単独で主動詞として用いられていたものを【表 6】に示す。

【表 6】本稿の自律移動表現における単独用法の動詞使用頻度

動詞種類	『華語跬步』(中国語)				『華語跬步総訳』(日本語)		
	単純主動詞				単純主動詞		
	様態動詞	経路動詞	直示動詞	中立移動動詞	様態動詞	経路動詞	直示動詞
頻度	6 (1.26%)	108 (22.59%)	193 (40.38%)	10 (2.09%)	1 (0.22%)	159 (35.65%)	228 (51.12%)
	317 (66.32%)				388 (87.00%)		

【表 6】に示すように、中国語において単純主動詞の用例数が 66.32%であるのに対して

日本語は 87.00%と非常に高い割合を占めている。これは、中国語の“回去”“回来”のような「経路+直示」の複合的な表現を日本語では「帰る」「戻る」のような「経路動詞」という単独用法で表現できるためである。また、日本語を見ると、「直示動詞」の使用率が圧倒的に多い 51.12%に達している。これは、松本 (2017) の調査結果である経路動詞 (40.1%) の使用が圧倒的に多いことと異なる数値になっており、中国語文を翻訳したことに影響されているとも言えるが、本稿の分析対象が会話文であることにも影響されていると考えられる。

複合動詞及び複雑述語が使用された例文の内訳に関して、中国語文を【表 7】に、日本語文を【表 8】に示す。

【表 7】 自律移動表現における複合動詞及び複雑述語の使用頻度 (中国語)

種類	複合動詞			複雑述語				
	様態動詞	経路動詞		経路動詞	直示動詞			
組み合わせ	経路+様態	様態+経路	その他	様態・直示	様態+直示	様態+経路+直示	経路+直示	その他
頻度	1 (0.21%)	4 (8.37%)	1 (0.21%)	0	4 (8.37%)	2 (0.42%)	144 (30.12%)	5 (1.05%)
計	1(0.21%)	5(1.05%)		0	156(32.64%)			

【表 8】 自律移動表現における複合動詞及び複雑述語の使用頻度 (日本語)

種類	複合動詞			複雑述語			
	様態動詞	経路動詞	その他	経路動詞	直示動詞		その他
組み合わせ	経路+様態	様態+経路	漢語複合動詞	付帯状況+経路	経路+直示	付帯状況+直示	その他
頻度	0	0	16 3.59%	3 0.67%	26 5.83%	10 2.24%	3 0.67%
計	0	0	16 3.59%	3 0.67%	36 8.07%		3 0.67%

【表 7】と【表 8】は、松本 (2017) の「直示動詞は複合動詞には参加しない」と「複合動詞と複雑述語における経路表示のパターンをまとめると、直示動詞がある場合は直示動詞を、そうでなければ経路動詞を最後に置く傾向がある」という指摘に基づいて分類している。松本 (2017) は日本語について述べているが、本稿では比較の便宜上、中国語文も同じ基準で表を作成している。

中国語文と日本語文ともに単独主動詞の使用が圧倒的に多いことが観察されるが、【表 7】に示すように、中国語文において「経路+直示」の使用が 144 例と 30.12%に達している。

それは、“出去”“回去”“回来”が多用されることが指摘できる。LAMARRE (2017) ではこれらの表現を「二形態素型」とし、とくに会話において頻度が高いと指摘している。また、【表 6~8】を見ると、様態動詞の使用が非常に少ないことが観察できるが、これは調査対象が会話文であるためであろう。「様態」「経路」「直示」の情報が競合することなく表現できる言語ではあるものの、会話文では移動を報告する場面や移動を行う意志の表明など、移動様態の情報が必要と感じられる場面が少ない。LAMARRE (2017) においては、「テレビドラマ」と「小説」を調査し、テレビドラマで「様態」情報が含まれる移動表現は7%を占めていると述べている。本稿で、「様態」「経路」「直示」の三つ情報が揃った例文は中国語文に2例のみ見られる。

- 32) 一去是坐车去的回头是骑驴回来的/往きには、車に乗って参りました、戻りには、驢馬に騎って帰りました (家常問答第 25 章)
- 33) 你滚出去罢/疾々と出て失せろ (家常問答第 40 章)

また、松本 (2017) は「複雑述語ではすべてが直示動詞を最終動詞としており」と述べているが、例文 32) の日本語文のように、最終動詞が「帰る」という「経路動詞」の例文が見られるほか、「騎て出る」のような最終動詞が「出る」という「経路動詞」の例文が2例見られ、「馬に騎る」という現代の場面では中々見られない交通手段に限定した表現だと思われる。

その他、「通り越して行く」という「経路+経路+直示」の例文が1例見られるほか、「同道して参る」「往つて御出ででした(か)」が見られるが、これは敬語表現を使用したいという翻訳者の意図の現れではないかと推測される。

8. おわりに

本稿は明治期に出版された近代中国語関係書『華語跬歩』とその日本語訳である『華語跬歩総訳』の会話を対象に日中両言語の自律移動表現の対照研究を行い、当時の自律移動表現の表現習慣として同じ事象を表現するに際し中国語の方が、移動動詞を選択する傾向が強いことと、会話文において経路関連要素である中国語の前置詞は日本語の後置詞ほど必要性が高くないことと、日本語における単独主動詞の使用は圧倒的であること及び、日中両言語ともに会話文において様態情報の必要性が非常に低いことが指摘できる。

参考資料

- 御幡雅文 (1903) 『華語跬歩』 文求堂
伴直之助 (1904) 『華語跬歩総訳』 裕隣館

参考文献

- 石田卓生 (2013) 「東亜同文書院使用以前の御幡雅文『華語跬歩』について」『同文書院記念報』第 21 巻 愛知大学東亜同文書院大学記念センター pp. 121-132
Christine LAMARRE (2017) 「中国語の移動表現」松本曜編『移動表現の類型論』シリーズ言語対照第 7 巻 くろしお出版 pp. 95-128
小嶋美由紀 (2019) 「中国語主体移動表現の様相—ビデオクリップの口述データに基づいて

- 一」 森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』くろしお出版 pp.91-116
- 呉 念聖 (2000)「中国語の移動表現」『法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編』111 卷 pp.167-179
- 商務印書館・小学館共同編集 (2016)『中日辞典第3版』小学館
- 田中茂範 (1997)「空間表現の意味・機能」『空間と移動の表現』中右実編日英語比較選書⑥ 研究社 pp.2-119
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2000~2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 松本昂大 (2016)「古代語の移動動詞と「起点」「経路」—今昔物語集の「より」「を」—」『日本語の研究』第12巻4号 日本語学会 pp.86-102
- 松本曜 (1997)「空間移動の言語表現とその拡張」『空間と移動の表現』中右実編日英語比較選書⑥ 研究社 pp.126-229
- 松本曜 (2017)「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜編『移動表現の類型論』シリーズ言語対照第7巻 くろしお出版 pp.247-273
- 丸尾誠 (2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社
- 山口明徳・秋本守英編 (2001)『日本文法大辞典』 明治書院
- Slobin, Dan Issac.2004. The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression of Motion Events. In Sven Strömquist & Ludo Verhoeven (Eds.), *Relating events in narrative*, Vol. 2. *Typological and contextual perspectives* , pp. 219-257. Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Talmy, Leonard.2000.A Typology of Event Integration.*Toward a Cognitive Semantics: Typology and Process in Concept Structuring*,pp.213-288. The MIT Press[高尾享幸訳(2000)「イベント統合の類型論 Leonard Talmy」坂原茂編『認知言語学の発展』 ひつじ書房 pp.347-451]
- Wenlei Shi and Yicheng Wu(2014)Which way to move: The evolution of motion expressions in Chinese. *Linguistics* 52(5), pp.1237-1292
- 黎錦熙 (黎錦熙) (1924)《新著国语文法》 商务印书馆 [大阪外国語学校大陸御研究所訳 (1943)『黎氏支那語文法』 大阪：甲文堂書店]
- 刘月华 (劉月華) (1998)《趋向补语通释》 北京：北京语言文化大学出版社